

戦略的視点からの日本宣教再考 —— 一福音主義学徒の提言 ——

有賀喜一

序

日本のキリスト教界指導者たちは、その時、対処する備えが来ているだろうか¹。

未来完了形思考の勧め

『これから5年後に、2千万人の日本の人々が神の国の民として迎えられ、各教会が礼拝者で溢れ、新しい教会が増殖され、あらゆる年代の人々、あらゆる社会の階層の人々がキリストによって造り変えられて、遂には社会そのものが、靈的、構造的、そして文化的にまで変革する福音化が起こったら、どうであろうか。日本のキリスト教界の指導者たち、各教会の牧師たち、役員たち、そして聖徒たちは充分受け取られるであろうか。日本には神が既に祝福して、高い教育水準、高度な技術、豊かな財源がある。神は確かにこのような驚くべき大突破を日本を通して現そうとしているのである。』

このように言われたのは、アメリカのフラー神学大学院、キリスト教指導者論の教授、ロバート・クリントン博士である。クリントン博士は、日本教

会成長研修所²の創立10周年記念講演に来られて、『未来完了形思考』³を紹介されて、私たちにパラダイム・シフト（視点の転換）を強く迫られたのである。

私が1971年から72年にかけて、フラー神学大学院の世界宣教と教会成長学部留学し、ラルフ・ウィンター博士のもとで、「キリスト教拡大史」⁴を学び、キリスト教会史とは、別な視点を、文化人類学的、社会学的、そして宣教学的に見るように導かれたのである。

旧約、新約時代、初代教会時代から現代までに、神による画期的なみわざが起こされて来た時を観察すると、4つの特徴を見出すのである。

1. 福音に対して反抗的であった人々が、突然受容的になること。
2. 新しいキリスト教の形の出現である。福音の核心を変えずに文脈化が進んで、人々が回心し易くなること。
3. 短期的に驚くほどの多くの人々が覚醒され、キリストに回心し、生きた教会員として教会に加えられること。
4. 福音の力の解放で、みことばの宣教で霊魂が回心し、イエスのみ名に

² 日本教会成長研修所は1979年、LIFE (Language Institute For Evangelism) の日本での最重要な貢献は、牧師養成に焦点を置いて企画された。初め、米国での3ヶ月間の研修から始まり、その後フラー神学大学院教授ロバート・クリントン博士のカリキュラムデザインによって、2年間の研修が、国内で原則として、各教派団体から12人が選ばれ、聖書的教会成長の理論と実際を学び、自分の教会を見直し、神のご目的に合わせた自分の教会への新しいビジョンに基づいて、具体的な成長計画書を、信徒と共有して、短期的、長期的に実践し、リーダー養成と教会増殖し続ける聖書的な教会の建て上げを目的とするものである。

³ ロバート・クリントン博士の未発表の論文『Future Perfect Thinking』(1991)。聖書信仰に立つならば、キリストの再臨を信ずるのである。主の再臨の時には、キリスト教会は主の花嫁として完全に整えられ、世界宣教は達成されていると信ずるのである。主の再臨の日時は、ただ父なる神だけがご存じであるが、未来の特定の日があることは信じ、その時までには神の教会と世界宣教に対するご計画は完了しているということで未来完了形思考と名付けられているのである。

⁴ Kenneth S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, Volume 1-7 (Harper & Row Publishers, 1970).

¹ フラー神学大学院、キリスト教指導者論教授論文『Future Perfect Thinking』(1991年)に基く講演での問いかけ。

よって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、病人のいやし（マルコ 16:15-18）が伴うことである。

私たちは、大きな規模ではなかなか見られないが、小さな規模で、それぞれに確かに神の生きたみわざとして体験しているのである。これから思い切った神の新しい事（イザヤ 43:19）、わたしたちの知らない、理解を越えた大いなる事（エレミヤ 33:3）を期待する時に、次のような観察を見出すのである。

1. 歴史的な大突破は、一般的に初まりはキリスト教の主流からではなく、キリスト教の支流と思われた群から（エルサレム教会ではなくアンテオケ教会から世界宣教が実現されたように）その働きが始まっていること。このためにキリスト教界の主流的指導者たちは、このような歴史的な神のみわざの展開が起こって来た時に、正しく認識し、喜んで受け入れて、単に見過ごさないようにすることを指摘するのである。
2. 歴史的な大突破は、その歴史的教訓としてパラダイム・シフト（視点の転換）をしなければならないことに気付かせられるのである。使徒の働き 10 章にあるコルネリオとペテロの引例のように、異邦人も神に受け入れられること、そして彼らはやがて異邦の世界に神のメッセージを伝えるセンターになることという視点の転換である。
3. 歴史的な大突破は、さらに、伝統的指導と伝統的構造に代って、新しい文脈化された福音の適用によって新しい指導と新しい構造が展開してくるのである。
4. 歴史的な大突破は、効果的な指導者は、大胆な神の御意による前進のために、時には危険を自覚しつつ、信仰による冒険に挑戦することを教えるのである。バルナバはアンテオケで、大胆にも急激な回心をしたパウロを探し出し、自分の側に置き、自ら模範となり、実地訓練し、責任を委譲して、危険人物だったパウロを見事に世界宣教の器と造り上げ、宣教のパラダイムを新しく構築したのである。

以上のラルフ・ウィンター博士のキリスト教拡大史と、ロバート・クリントン博士の未来完了形思考の挑戦から、大突破の4つの特徴、4つの観察を教えられ、大きなパラダイム・シフト（視点の転換）をさせられたのである。

神が日本に大突破（リバイバル）を計画していて下さると信じ、そのために必要な戦略をともに考察しようとしているのである。

以下に、個人的な視点と関心から、日本宣教の今後の可能性について述べさせていただく。日本の宣教のための聖書的教会の建て上げを戦略的に、リバイバルを推進して、21世紀に、この日本で現実のものとなり、日本を通して神の栄光が顕されることを切に願う者である。

1. リバイバルとの出会い

1. 1947年12月31日、真剣にまことの救いを求めてお寺に向かっていった私が、クリスチャンの友人に無理矢理連れて行かれ、クリスチャンの家庭で持たれていた除夜祈祷会で、中村秀雄さんの生きた証しと、スウェーデン宣教師、カール・グスタフソン師（中国奥地伝道に40年間奉仕していたのが、共産化した中国から追放されて来日）の単純明解な福音の提示で、神、人間（自分）の罪、キリストの十字架と復活による救い、そして悔い改めと信仰による即座の救いの体験にまで導かれ、その夜、涙をもって罪を悔い改め、イエス・キリストへの信仰によって、聖霊による新創造の恵みに与ったのである（II コリント 5:17）。さらにマタイによる福音書 9 章 2 節のみことば『子よ、心安かれ。汝の罪赦されたり』（文語訳）で生涯疑うことのない聖霊による聖言に立った救いの確信にまで導かれたのである。後日、知らされたのであるが、中村秀雄さんは、1930年代の日本でのホーリネス・リバイバルの器、中田重治師を通して救われたリバイバルの火の子であり、スウェーデン宣教師は、1901年、アメリカ、カンザス州トペカのベテルバイブルカレッジにおけるペンテコステ、さらに1906年のカリフォルニア州、ロスアンゼルス市アズサ・ストリートのリバイバルの大波がやがてスウェーデンに燃え上り、その中からホーリネスを強調するスウェーデン・ホーリネス・ミッシ

ョンが生れ、そのリバイバルの中から中国へ、そして日本に導かれて、私にまで及んだのである。その宣教師は、いつも『私はリバイバルの炎の中で生れたから、くすぶる煙には耐えられない!』と言っておられ、聖潔と宣教に燃えておられたのである。

2. 関西聖書神学校に 1954 年入学して、毎週火曜日夜の定例祈祷会、毎月第 3 金曜日の徹夜祈祷会、毎年 9 月の 3 日間の断食祈祷会での沢村五郎校長のリバイバルにかける渴きと熱祷は、卒業するまでの 4 年間を通して燃え上り、卒業してから今日も尚続いているのである。沢村五郎師は 1977 年 7 月、満 90 才で召天された時、最後の叫びが『リバイバルを!』であった。その年は、私が母校の関西聖書神学校、第三代目の校長に就任した時であり、私も初代校長のリバイバルスピリットに燃えたのである。今も燃え続けて変らない。

3. 1962 年 4 月、4 年間の栃木県大田原市での開拓伝道と教会の建て上げの後、フルタイムの伝道者として、既に本田クルセードとして全市協力伝道に立ち上っておられた本田弘慈師とともに、日本をキリストへのために献身したのである。『霊に燃え、主に仕えよ』(ロマ 12:11) で生涯貫かれた福音の勝負師、リバイバリストであった本田先生との 15 年間、日本全国 250 都市でのクルセード。夜の集会とその前の時間のお友だち伝道で、合計 200 万人に福音を宣べ伝え、決心者は 40 万人を超えていたのである。そこで強く知らされたことは、伝道者は、決して当たり、外れの説教をしてはならないこと。必らず、毎回、神が用意されている靈魂の救いの実現のために、真剣に勝負しなければならぬということであった。毎回集会の前に、先生と床に頭を擦りつけて祈り抜いたものである。『火は絶えず祭壇の上で燃え続けさせなければならない。消してはならない』(レビ 6:13) と、聖潔の徹底と祈祷の生涯に打ち込んだのである。リバイバルの火は自動的ではない、常に自ら心して謙り、自己の無能、神の全能に依り頼み、万事聖霊、万事祈祷で(ピリピ 3:3、ゼカリヤ 4:6) 生きる時に、天よりの豊かな油注ぎがあり、主がその奉仕に栄光を顕されることを知らされたのである。

4. 1971 年、フラー神学校の図書館で、山森鉄直師のデューク大学で取得された博士論文、「日本の教会成長」を読み、日本でも 3 回のリバイバルがあった事を知らされて、不思議に燃え上る経験をしたものである。第 1 回は、1883 年の「同志社リバイバル」と名付けられた、ミッションスクールアプローチによるリバイバル。第 2 回が、「全国協同伝道」⁵、並に、「20 世紀前進運動」という 1901 年から 1904 年までの 3 年間、「日本基督教会同盟」が結成され、教役者と信徒たちの伝道チームが編成され、日本全国で、集会数 3,336 回。聴集 618,647 人。決心者 21,152 人という日本宣教の大きな前進を祝ったのである。第 3 回が 1930 年代の中田重治師によるホーリネス・リバイバルである。4 年間でホーリネス教会は 7 倍に成長し、教会未設置の各県に、そればかりでなく、日系人の移民している世界の至る所までも宣教を拡大したのである。私は、自分の使命としている日本の福音化のために、既に 3 回もリバイバルが記録されているこの論文を発見し、遂にこれを日本語に訳して、いのちのことは社から出版したのである。このことは、私を奮起させ、どうしても日本に第 4 回のリバイバルを主からいただくことと固く決意させたのである。

5. フラー神学大学院 (1971-72 年留学) のクラスには、75 人の神学生が全世界 35 の国々から来ておられ、自分の国の伝道の実情が発表されたのである。アフリカのケニヤは、当時既に 65% がクリスチャンであるといい、アフリカの諸国は軒並みに 80% 近い人々にリバイバルが継続的に起り、ブラジルをはじめラテンアメリカの各国で人口増加率よりもクリスチャン増加率がはるかに大きく、社会の不安の中で、キリスト革命が起こされていたのである。1971 年クリスマスシーズンに、3 週間かけて、6 つの中米を訪問し、自分の目で浸透伝道⁶の目覚ましい結果を確かめることができたのである。

⁵ 海老沢有道、大内三郎共著『日本キリスト教史』(日本基督教団出版部)、465 頁

⁶ 浸透伝道 Saturation Evangelism。世界で初めて 1959 年中米のコスタリカで伝道していたケネス・ストラッカ師による提唱された「深みの伝道」に始まる、信

特に「深みの伝道」本部があるコスタリカでオーランド・コスタス師を通してその理論と實際を講義していただき、併せてその働きの現実を見て、日本の総動員伝道のモデルを体験したのである。

6. 1972年4月から5月にかけて40日間、アフリカのケニヤで、ディスター・コミュニケーション主催の「キリスト教伝達学と教会成長」国際研修所で特別研修が許された。アフリカ、ラテン・アメリカ、アジアからの各ミッション代表者たち、若手のリーダーたちが生活を共にして、学際的な学び（神学的、実際の二面を合体した貴重な学び）を受け、リバイバルを体験している人々の生きざまを現場で確かめられたことは、大きな霊的遺産となったのである。尚幸いにもここで取得した研修は、フラー神学大学院の学びの単位に認定され、二重の喜びともなったのである。

7. 1974年の韓国でのExplo. '74、1992年から連続5回のアルゼンチンでの「収穫伝道国際研修会」⁷、オーストラリア、シンガポール、台湾、ガテマラ、中国、モンゴール、ネパール、マレーシア、ミャンマー、カンボジア、スリランカの国々での「指導者養成研修所」を通して、『神がその中におられないなら、絶対失敗に終るといふ位の大きな事を、神のために試みよ』⁸とい

徒を生きたキリストの証人として整え、社会のあらゆる階層に福音をもって浸透していくという伝道戦略の総称。日本では「総動員伝道」と名付けて、1970年四国から実践されている。1974年のローザンヌ世界宣教会議で最も注目された当時の伝道戦略として紹介されたのは、ジェームズ・ケネディ牧師の「爆発する伝道（Explosion Evangelism）」と「浸透伝道」であった。

⁷ Harvest Evangelism International Conference. Harvest Evangelism Int. 代表エド・シルボソ牧師。現在本部は米国北加、サンノゼ市にある。毎年、1991年から現地アルゼンチンで国際研修会が開かれている。最近では、地域全体に変革をもたらすトランスフォーメーションを力強く推進しておられる。

⁸ Haggai Institute（第3世界のリーダー養成国際研修所）創立者、ジョン・ハイ師のことば。「Attempt something so great for God, it is doomed to failure unless God be in it.」1989年ハワイ研修の時、直接お聞きして以来、個人的に大きな挑戦のことばとなっている。

う挑戦を、それぞれの国の指導者たちが真剣に取り組んでいるのを見て、日本に対する大きな重荷を実感しているのである。アルゼンチンではその収穫伝道を通して過去100年かかった分を、4年間で成就し、ある都市では市長、市会議員たち、実業家たち、教育界の指導者たち、病院の医師、看護婦たちがクリスチャンとなり、社会まで変革されるというトランスフォーメーションが起って来ているのである。私もその代表的な都市、マーデルプラタの変革の事実を目で確かめているのである。その他ガテマラのアルモロンガ市では、福音によって個人、家庭、社会が変えられたばかりでなく、自然界まで荒廃から3倍の収穫を得る祝福の地とまで変えられ、地のいやしを実現しているのである。「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。」(II歴代7:14)。

II. リバイバルの定義

1971年フラー神学大学院のクラスの一つに、エドウィン・オアー博士の「リバイバル」があり、そのクラスの資料として提供していただいたものの中からいくつか紹介すれば参考になると思う。

1. ウィリアム・B・スプレーグ

「どこにおいてであっても、信仰が比較的沈滞している状態から活力を増してくるのを見るなら、またキリスト者であると公言している者が義務に対して今まで以上に忠実になり、人々がこの世から出て、新たに教会に加わり、それによって教会の力が増大するのを見るなら、その状態はためらうことなく信仰のリバイバルである。」

2. チャールズ・フィニー

「神への従順の新しい開始に他ならない。回心した罪人の場合のように、最初の一歩は深く悔い改め、心砕かれ、へりくだりと罪の放棄とをもって神の御前にちりのようになること。」

3. G・J・モーガン

「人々を内住の御霊によりリバイブして神を悟るに至らせること、すなわち、信者を眠ったような状態から覚醒させることである。未信者は『自分の罪過と罪とによって死んで』いるからそれはできない。そこにはリバイブすべきいのちがないから、リバイブされることはあり得ない。しかしキリスト者がリバイブされる時、そこにはいつも未信者の回心が伴う。それは二重の意義を持つ。すなわち、キリスト者のうちにおける霊的のちや活力の復興と罪人の回心とである。」

4. エドウィン・オアー

「主の御前からの慰めの時（使 3:20）であり、先ず、キリスト者と教会に維新が起ることである。維新は、霊的な更新と組織的構造的刷新がなされることである。次に、未信者の覚醒となり、さらにキリストによる大いなる回心（救霊）となり、遂に継続的、全体的な教会成長と宣教の拡大となるのである。この全体をリバイバルと言う。」

リバイバルは、神の不思議な、至高のみわざである。神はリバイバルにおいてご自分の民を訪れ、彼らを回復し、鼓舞し、解放し、ご自身の全き祝福に導かれる。そのような神のご干渉は、まず第一に、教会内における、次に個々の信者のうちにおける神のみわざなのであるが、結果として伝道をもたらすのである。

私は以上の各リバイバルの定義の中で、エドウィン・オアー博士の主張する聖霊による維新がキリスト者と教会に、更新と刷新をもたらし、次に聖霊による覚醒と教会加入が未信者に拡大し、継続的、全体的教会成長⁹と宣教

の拡大となるという定義に立っている。

1992年、全日本リバイバルミッションが甲子園で宣教大会を神から挑戦を受け、滝元明師が信仰によって受け取り、私に実行委員長を依頼されたのである。2週間の祈りの中で、主は、「見よ、わたしは新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。あなたは、それを知らないのか。」（イザヤ 43:19）と、「これは、『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」（ゼカリヤ 4:6）のみことばによって、神のみこころ、神のタイミングであることを確信し、その申し出を受け入れたのである。

主は私を導かれ、全日本リバイバル甲子園ミッションの理念として、三つの原則を示して下さって、推進するようになったのである。第一は、堅く聖書信仰に立つことである。聖書を誤りのない神のみことばとして信じ、みことばの上に立ち、みことばに聴従し、みことばの全部を宣証することである。第二は、「権力によらず」というように、いわゆる人間的な組織力によらない、全日本の教会の主にある聖書信仰に立つすべての教会の聖霊に動かされての協力によるということである。

全日本の救いのために、主が立てられたすべての主の教会の霊的遺産を尊重しながら、福音の宣教のために一致するというのである。その為には、1993年4月に開かれた、「霊的戦い全国研修会」の機会に、当時主講師の一人、シンディー・ジェイコブス女史の導きで、ペンテコステの流れの教会と福音的教会の間にあった偏見、誤解、批判、中傷を相互に悔い改め、和解に導かれ、聖霊の傾注の中で、美しい宣教への一致が証しされたのである。第三は、救霊に焦点を合わせた執成の祈りと霊的戦いを展開するということである。1966年のベルリンでの世界宣教会議では、「一つの民、一つの福音、そして一つの使命」という主題で、「福音」とは何かと再確認された。1974年のローザンヌ世界宣教会議では、「全世界に神の声を聞かしめよ」という主題で、「宣教の方法」が検討されたのである。1989年のマニラでの第二回ローザン

り、継続的とは、その地域全体にまで福音が宣教されるまでということである。

⁹ 継続的、全体的教会成長とは、日本教会成長ネットワークが主張するもので、質的成長（聖言、礼拝、教会生活、家庭生活、社会生活が聖霊によって更新されるもの）、奉仕的成長（教会がこの世との接触を常に持ち続け、積極的に社会の必要に応えるもの）、有機的成長（教会内の相互の深い結び付き）、そして量的成長（新しい回心者が加えられて拡大し、枝教会が開拓される拡張、そして文化を異にする世界へと宣教拡大するもの）、これらの4つの成長の全体を指すのであ

ヌ世界宣教会議では、「全世界に全福音を、全教会で宣べ伝えよ」の主題で、宣教のすべてが見直され、検討されたのである。その中で、福音は靈魂の救いを根幹にして、身体の病のいやし、靈的解放、内面のいやし、すなわち、全人の救いが宣証され、靈的戦いも力強く推進するよう宣言されたのである。私は神の摂理的導きの中で、これらの全部の世界宣教会議に出席することを許され、世界的レベルにおいて、福音の全人的適用、福音派とペンテコステ・カリスマ派の聖書的一致の前進（ベルリン大会では、福音派のみ、ローザンヌ大会では、ペンテコステ・カリスマ派の方々はオブザーバーの資格で参加を許され、1989年のマニラ大会の時にはともに両陣営から半々の参加）があり、最早何派の教会ではなく、世界には一つのキリストのからだである教会があると、聖書的公同の教会が宣言されたのである。

日本でも、それぞれの団体、教派、教会の歴史的、靈的遺産を相互に理解し、その特質を尊重しながら、日本の福音化のために、聖書的一致に前進するよう心から願う者である。全日本リバイバルミッションは、今も尚、この三つの原則をもって、「日本と世界にリバイバルを！」のビジョンと信仰で、主の御導きのもとで、地域教会とともに主と教会に仕えているのである。甲子園では、3日間で12万4千人の方々が集められ、2万5千人の人々が、招きに応じて恵みの座に来られたのである。大会1ヶ月前、私は韓国のある祈禱院に導かれ、祈りの時を早朝から3日間、3時間持って主の前に待ち望んでいた時、主は、「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい靈を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」（エゼキエル 36:26）と、「息に預言せよ。人の子よ。預言してその息に言え。神である主はこう仰せられる。息よ。四方から吹いて来い。この殺された者たちに吹きつけて、彼らを生き返らせよ。私が命じたとおりに預言すると、息が彼らの中にはいった。そして彼らは生き返り、自分の足で立ち上った。非常に多くの集団であった。」（エゼキエル 37:9,10）、さらに、甲子園ミッション大会の前であったのに、「主がシオンの捕らわれ人を帰されたとき、私たちは夢を見ている者のようであった。そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。そのとき、国々の間で、人々は言った。『主は彼らのために大いなることをなされた。』

主は私たちのために大いなることをなされ、私たちは喜んだ。主よ。ネゲブの流れのように、私たちの捕らわれ人を帰らせてください。涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。種入れをかかえ、泣きながら出ていく者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰って来る」（詩 126:1-6）とのみことばをもって、甲子園ミッションの祝福を預言的に示してくださり、大きな確信と期待を持って大会に臨んだのである。1万8千人に及ぶ祈りの勇士たちによって、38万時間（甲子園の座席が6万あり、3日間で18万人が動員されるよう、その一人一人のために執成しの祈りをするため18万時間の目標に対して、結果は38万時間の祈りが積み重ねられた）、大会前に750教会で決起大会が持たれ、キリスト者と教会に聖靈による維新を祈ったのである。それは動員の原動力となり、各教会が教派を超えて、福音宣教のために一致して働く喜びを味わったのである。日本の新しい宣教の一ページを開いたミッションと主は勝利を与えてくださったのである。日本人による、日本人のための、日本人のミッションの大胆な一歩となったのである。

全日本リバイバルミッションは、以上のリバイバルのコンセプトに立ち、三つの原則に従い、甲子園の後、「ケルビムの間の炭火をあなたの両手に満たし、それを町の上にまき散らせ。」（エゼキエル 10:2）、「火を取れ」（エゼキエル 10:6）の聖言に励まされ、継続して全日本に展開するよう導かれ、主に召された伝道者が一つになり¹⁰、滝元明師を主幹に、私が代表としてともに、ひたすら全日本にリバイバルを信じて立ち上っている訳である。1994年、東北、沖縄、四国。1995年、日本海、北海道、信州、第2回四国。1996年、第3回四国、富山。1997年、九州。1998年、東京。2000年、スーパーミッション東京40日、大阪4日。2002年、関西40日。2003年、名古屋。2004年、沖縄スーパーミッション。2005年、北関東。2006年、四国。2007年、

¹⁰ 1970年、日本リバイバル・クルセードが、滝元明、田中政男両師によって始められた。1994年、甲子園ミッションの後、有賀喜一、平岡修治、下條末紀子、滝元順の各師が加えられ、それぞれの賜物が活かされて拡充され、新城教会、プレイズ出版の岡本信弘師を財務担当として、実行委員会が結成された。名称も、クルセードという名からイスラム圏の人々へ配慮して、全日本リバイバルミッションと改名したのである。

ハワイの各地にミッションが展開されて来たのである。

各教会に確実に根付いた決心者たち、献身した若者たち¹¹、そして牧会者、伝道者、宣教師として奉仕しておられる方々にお会いすることは、ミッションの当事者として、本当に喜ばしいことである。

Ⅲ. リバイバルの歴史的展開¹²

1. アッシジの聖フランチェスコのもとに起ったリバイバル

アッシジのフランチェスコ（1182–1226）は本名はジオバーニ、フランチェスコは仇名で、小さなフランス人の意である。享乐的、快楽的、放らつな生活から転機的な回心をして、マタイ 10:7,8 から「行って、『天の御国が近づいた。』と宣べ伝えなさい。病人を直し、死人を生き返らせ、ツァラアトの人をきよめ、悪霊を追い出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」のみことばで、1209年2月24日の大伝道会へと新しい使命に立ったのである。路傍説教、「フラティ・ミノレス」（小さき兄弟たち）と名付けられた70人による2人1組の派遣伝道、伝道の情熱、民衆の言葉、喜びの調べ、圧倒的な愛の実践をしてイタリア全土への拡大をしたのである。

2. サヴォナローラのリバイバル

1452–1498年に主に用いられた器で、神の声を聞く、神のしもべとなり、新約聖書の最初の教会と自分の時代の教会を比較して、預言者的奉仕をし、全国民的覚醒を展開し、特に若者たちを動員して、偶像の一大祭典と対決して大勝利を得、1498年5月23日、輝しくも殉教したのである。

¹¹ ミッションを通して献身を表明した人たちは、母教会指定の神学校へ、またどうしてもリバイバルの器を目指した人たちのために1996年から、リバイバル聖書神学校が設立され、聖書的、靈的、そして実践的、特に靈的戦いのとりなしの祈りと実践の諸相の学びが組まれている。

¹² メンデル・テイラー『伝道の歴史的探求』（福音文書刊行会、1977）。

3. マルチン・ルターとドイツにおけるリバイバル

15世紀の啓蒙時代、16世紀の教会の墮落（世俗主義、権威主義、そして形式主義）の時に、マルチン・ルターは、1483年から1505年、宗教改革のため主に用いられた。彼の修道院生活（1505–1511）、「聖なる階段」（サンクトゥス・スカラ）の経験（1511年1月）、そして、ヴィッテンベルク大学での、詩篇、ローマ人への手紙、ガラテヤ人への手紙講義を通して、遂に宗教改革の波は起こされたのである。1517年10月31日、ヴィッテンベルク教会の北の扉に、免罪符に関する彼の見解を公示したのである。ルターは、信仰の使徒となった。主の聖言を強調し、信仰者の祭司性を強調し、儀式ではなく、説教中心主義を強調し、伝道を強調した。ルターの教えを受けた者は、16,292人で新しい改革に燃えて出ていったのである。

4. カルヴァンとスイスのリバイバル

ルターの宗教改革の伝道の推進力は、改革派の人々の努力によって、新しい大きさと広い視野が与えられたのである。善きわざによる救いに対抗するものとして、神がお与えくださる恵みによる救いを強調する神学が展開されたのである。『キリスト教綱要』を出版（1536）し、ジュネーブを「神の都」に改造する運動を展開したのである。

カルヴァンは、恩寵の使徒と呼ばれ、神の主権、人間の絶望状態、キリストの十全性、恩寵による救い、その恩寵は神の選びによって付与されると強調したのである。

カルヴァンの影響は、あらゆる階層の人々に伝道し、諸国の首長へのキリストの主権を主調し、フランス、オランダ、英国、スコットランドでは、一般民衆の運動として展開したのである。

5. ジョン・ノックスとスコットランドのリバイバル

彼は激しい迫害の中、1554年、宗教的亡命者となって、ジュネーブに移り、血のメアリとの祈りの対決をし、「我にスコットランドを与え給え、然らざれば、死を！」との叫びは、今尚、我らの心をも揺り動かすのである。彼の伝

道は、王国伝道、神の国伝道といわれ、キリストによる新しい世界の樹立を進展させたのである。

6. ジョン・ウェスレーと福音的リバイバル

「火の中から取り出された燃えさし」(1709)、「不思議に心が燃えた」オールドスゲートの体験(1738年5月24日)、「小さなペンテコステ」(1739年元旦)といわれる、火のリバイバルから、大衆伝道に立ち上がったのである。

ウェスレーの伝道法は、野外説教で、1万人～3万人が集まったといわれる。信徒説教者を40人以上も訓練し、信徒による大リバイバルを推進したのである。広く印刷物を用い、音楽による伝道も重んじたのである。青年伝道、日曜学校、組会を開設し、英国から世界へ、宣教の拡大に貢献したのである。

また新しいグループによる伝道が推進され、キャンプ・ミーティング伝道、都市伝道、YMCA、救世軍、ザ・フェイス・ミッション、ペンテコステ祈祷同盟が生み出されて行ったのである。英国全体に、1859-60年は、第2回、福音主義的大覚醒が起こったのである。その結果は、祈りの重視、個別訪問、個人伝道者の訓練、信徒のリーダーシップ、野外説教(アイルランドでは、ある200人の住む村で、7,000人の大会となった)、ハレルヤ隊と言う、各背景を持った人々が救われて伝道隊を形成したのである。彼らは、プロボクサー、闘犬士、ギャンブラー、盗人、熊とのレスラーなどで回心した人々であった。青少年伝道を重視し、音楽伝道を充分併用した。集会後のフォロースルーの集会も効果的に用いたのである。

このように、リバイバルは、神の人が十字架への途を示し、これによって大衆が天に向かって動かされる時に、何か起きるといふ例である。「義の大雨」(ホセア6:3、ヨエル2:23)が大洪水のように降り、さらに、「義の支配」(イザヤ62:2)が国々に及び、神の栄光を見るようになるのである。

リバイバルは、三位一体の神の生きたお働きである。リバイバルは、恵みに徹した神のしもべたちとともに起こされるものである。リバイバルは、永遠的な「収穫作戦」によって結果をもたらすのである。

IV. 日本の宣教を考える戦略的提案

1. 嵐の中の前進

20世紀中葉、突然召天された世界宣教拡大歴史家ケネス・ラトゥレット博士は、2000年間のキリスト教拡大史¹³の視点から七つの時代に区分し、①最初の5世紀(500年迄)、②不確実の1000年(500～1500)、③前進の3世紀(1500～1800)、④偉大な世紀(欧州と北米、1800～1914)、⑤偉大な世紀(中米、南米、オーストラリア、アフリカ、1800～1914)、⑥偉大な世紀(北アフリカ、アジア、1800～1914)、⑦嵐の中の前進(全世界、1914～1970)と鋭い視点をもって分析された。ラトゥレット博士召天の後、ラルフ・ウィンター博士が1971年に、1945年から1969年までの時期を書き足して、『信じがたいほどの25年間』¹⁴と題した。広島原爆投下がこの信じられないほどの嵐の中の前進の始まりであり、その25年の終りは、月面着陸の画期的な出来事であった。第三世界の99パーセントが解放され、政治、経済、文化、そして社会的大変動が起こされ、信じられないほどの勢いをもって宣教が拡大して来たのである。

2. パラダイム転換

もう一人の20世紀後半の卓越した宣教学者デイヴィッド・ボッシュ博士は、1992年4月、南アフリカで自動車事故で62才で召天されたが、『宣教のパラダイム転換』¹⁵を1991年に出版し、その主張は、世界教会協議会(WCC)からも、世界福音同盟(WEF)や、ローザンヌ世界宣教継続委員会(LCOWEC)からも尊敬され、キリスト教界の「橋渡しをする人物」であった。このボッシュ博士は、キリスト教宣教の理解と実践の一大変化の真只中にあることを

¹³ Kenneth Scott Latourette, *A History of the Expansion of Christianity* (Harper & Row, 1976), vol. 1-7.

¹⁴ Ralph D. Winter, *The Twenty-Five Unbelievable Years, 1945-1969* (The William Carey Library, 1970).

¹⁵ デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換』(東京ミッション研究所、2001)。

指摘して、パラダイム転換しなければならないといているのである。

3. 第三勢力の台頭

日本で実際に宣教師として伝統ある京都で働かれ、元トリニティ神学大学の宣教学の教授、デイビッド・ヘッセルグレーブ博士は、『今日の選択、明日の宣教』¹⁶の中で、現代宣教におけるペンテコステ派の役割を、第三勢力の台頭として、(ちなみに、第一勢力はカトリック、第二勢力はプロテスタント)位置づけ、この運動は、その始まりから僅か2世紀足らずの間に、世界大のリバイバルをもたらしていると注目しているのである。そこには4つの流れがあるとされている。①古ペンテコステ派、②新ペンテコステ派、③カトリック・カリスマ派、④第三世界、特にアフリカの非白人教会のペンテコステ派である。これらの流れに共通する特徴は、①異言、②預言、③いやし、④サタン・悪霊に勝つ力、⑤聖霊の各種の賜物による奉仕である。

4. 世界的執成し一致の祈りの戦略

1989年のマニラにおけるローザンヌ世界宣教会議の時から、霊的戦いの祈りとともに、戦略的な世界執成しの祈り手の一致が提唱され、現在、世界中に、毎日4時間から6時間は、世界の各国のために重荷をもって執成しの祈りをささげてくださいる方々が、2千万人はおられるということで、北米、コロラドスプリングスには、「世界祈りのセンター」が建てられ、24時間祈りの連鎖が結ばれているのである。この方々の日本への重荷は、非常に大きいのである。

5. 第三世界からの戦略的貢献

まず中国の家の教会である。中国のキリスト教会は、迫害下力強い成長を遂げ、今尚、毎日3万5千人がキリストのからだに組み入れられていると、香港の中国キリスト教研究センターでは発表している。その秘訣が、家の教

会方式である。

第二に、韓国の教会の祈りである。牧師自身、誰でも40日断食祈祷の実践者であり、徹夜、早天、祈りの山での集中祈祷、説教に生命をかけ、霊的権威の持続と発揮、信徒による区域礼拝と積極的伝道、ある年、韓国宣教の時、ある教会での証しで、一人のクリスチャンが1年間に、実に75人をバプテスマまで導かれたというのである。

第三は、南米、中米、アフリカ、アジアの各地での、「力の伝道」¹⁷である。ローザンヌ誓約¹⁸、霊的闘争の項目で、「私たちは、教会を倒し、教会の世界伝道のわざを失敗に終わらせようと絶えずもくろんでいる悪の力と支配とに対する、たゆまざる霊的闘争のただ中に置かれていると信じる。また、私たち自身を神の武具をもってよらい、真理と祈りの二つの霊的武器をもって戦い続けてゆく必要のあることを知っている。」テモテ・ワーナーは、「この世にある偽りの神々よりも、イエス・キリストがもっと力ある偉大なお方であることを、目に見える形ではっきりと実証すること」¹⁹といているのである。そこには、真理の対決、力の対決、そして、忠誠の対決がある。私たちは、福音は、神の力であることを信じ、福音の全部を、即ち、救い、いやし、解放、聖霊の恵みを、力強く宣証する所に、神の栄光が顕れるのである。

V. 日本への戦略的適用

1. ヨシュア・ビジョン—神の幻

「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」(ヨシュア 1:9)。

神ご自身がカナン地の地を与えると約束し、そのためにエジプトから栄光の脱出をさせ、荒野の旅路を導いて、彼らに命令して、「立って、渡り、行け。」

¹⁷ ジョン・ウィンバー『力の伝道』(マルコーシュ・パブリケーション、1994)

¹⁸ ジョン・ストット『ローザンヌ誓約』(いのちのことば社、1976)

¹⁹ テモテ・ワーナー『神の栄光のために』(新生宣教団、1995)

¹⁶ デイビッド・ヘッセルグレーブ『今日の選択、明日の宣教』(Zondervan Corporation. 関西ミッションリサーチセンター、1993)、116頁

とされているのである。勝利も保証され、神の臨在が約束されているのである。日本に対する神のご計画を、神の視点から、パラダイム・シフトして、見直し、日本に神の時、神の回復の時が来ていることを固く信じて、立ち上がろう。

1988年、12月8日の真夜中、就寝中に、ふと誰かの手ざわりを感じて起き上がったのである。直ちに主の臨在を覚えた。主は、次々と3つの聖言をもって語られたのである。「わたし自身がいっしょに行って、あなたを休ませよう。」(出33:14)。「深みに漕ぎ出して、網を降ろして魚をとりなさい。」(ルカ5:4)。「主の道を用意しなさい。あらゆる人が、神の救いを見るようになる。」(ルカ3:4-6)。日本伝道に対する主の新しい挑戦だったのである。関西聖書神学校長を辞任して、フルタイムの神のしもべとして、日本のリバイバルのため、ヨシュアのように、足のはきものを脱いで、主に従ったのである。「天よりの啓示」(使26:19)に生きるためである。日本のすべての神のしもべたちに、このビジョンに生きるようお勧めするものである。

2. ネヘミヤ効果—霊的戦いの祈り

ネヘミヤによる、エルサレム城壁再建の過程は、まさに、戦略的霊的戦いのプロセスである。ネヘミヤの断食の祈り、エルサレムでの現地調査、動機付けをしっかりとて工事の着工、外国からの攻撃、内部からの抗議、厳しい誘惑など、ネヘミヤ記1章から6章までの展開は、まさに戦略的霊的戦い²⁰のすべてを明らかにしているのである。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(エペソ6:12)。

「こうして、城壁は五十二日かかって、エルルの月の二十五日に完成した。私たちの敵がみな、これを聞いたとき、私たちの回りの諸国民はみな恐れ、

大いに面目を失った。この工事が、私たちの神によってなされたことを知ったからである。」(ネヘミヤ6:15,16)。

個人的な執成しの祈り、家族的、近接地域的、地域全体的、国家的、そして国際的な執成しの祈りのネットワークなどは、神の勝利をもたらすものとなるのである。

3. 主イエスの宣教—福音の全部の宣証

主は自らこの世に来られた時、油そそがれた王、預言者、そして祭司として、完全に、「ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」(マタイ1:21)と、十字架と復活を通して、主の救いには、独占性²¹(使4:12)、局限性(テトス2:14)、究極性(Ⅰコリント1:30)がある。さらに、主の救いには、救い、悪霊の追い出し、新しいことばを語る聖霊の恵み、病人のいやし(マルコ16:15-18)が、全人的救いとして約束されている。1966年ベルリン世界宣教会議で確認した福音とは、霊魂の罪からの救いが強調されたが、1974年のローザンヌでは、救いが、全人的であり、霊と心と体の全領域に及ぶことが確認され、1989年のマニラでは、悪霊からの束縛解放も、救いの福音の力に、含められたのである。

主イエスの宣教の最初のことばは、「神の国は近くなった。悔い改めて、福音を信じなさい。」(マルコ1:15)であった。

恵みの福音(使20:24)、救いの福音(エペソ1:13)、解放の福音(ルカ4:18)、いやしの福音(マルコ16:18)、御国の福音(Ⅰコリント15:28)、そして栄光の福音(Ⅱテモテ1:11)である。この福音の全部を宣べ伝え、今、主ご自身が、聖霊によって、私たちを通して、生きて働かれているように、奉仕していくなら、必ず、主の栄光は、日本の宣教の上に、顕されることを信ずる者である。

(全日本リバイバルミッション代表、リバイバル聖書神学校校長)

²⁰ 滝元望『この国のいやし』(プレイズ出版、1996)、滝元順『神の栄光を取りもどせ』(プレイズ出版、2006)

²¹ エーリヒ・ザウアー『十字架の勝利』(聖書図書刊行会、1963)、28頁